



# 覗く眼

第11回

八代が口を開いた。

「おい、鎌をひっこめろ。刑事さんが怯ええてらっしゃる」

何という憎らしい男だろう。源治は歯ぎしりをする。その苛立ちは、己の心を正確に見透かされているからに他ならない。

「証拠ってのは、これなのかい？」

男が鎌をひっこめ、自らも源治の前から退くと、源治は金縛りから解けたように八代に向かって口を開いた。

「ええ。死体をあのような細かな肉片にする、などという常人離れした行為ができるのは、誰か？ 今のこの男の動きを見れば明らかでしょう」

「ふん。もう証拠っていうよりも、自供だな」

問題はここからだ。八代たちが一体何を考えているのか。源治はしだいに冷静さを取り戻してきた頭で、思いを巡らす。けれども今の八方塞な状況をどう打開するか。良い考えは浮かんでこない。

「けどよ、人を殺すには、動機がいるぜ」

奇妙なやり取りになってきた。犯人側の洞窟でおこなう、取り調べ。さすがに源治もこんな状況は、経験した事がない。

「動機なんか、ないですよ。何しろこの男は、人を殺すためにつくられたんですからね」

「つくられた、だと？」

源治が反応したのは、八代の言葉の最後の方だった。生まれてきたではなく、つくられた、とは・・・？

「大内さん、あなた戦地でのご経験は？」

「この齢だ。南方に行ってるぜ」

「敵兵に向かって、躊躇無く銃を向けられましたか？」

「そりゃあ・・・」

あの状況だ。撃たなければ、こちらがやられる。感情を殺し、引き金をひいた。けれどもその前後の葛藤。それは凄まじいものがあった。

何度か敵兵と、鉢合わせになった事がある。そこで白兵戦になるのだが、目の前にいるのは敵の軍隊という塊ではなく、生身の人間。目の前で、己の手で剣を突き立てた相手は真っ赤な血を流し、のたうちまわり苦しむ者もいれば、泣き叫ぶ者もいた。人種、国籍、肌の色。それらが違って、同じ人間だという事が、生臭く感じられた瞬間だった。今でも時折、頭に浮かぶ消せない記憶。おそらくあの世に行っても消せないだろう。

「人間という生き物は、弱いものです。感情というものがありますから」

八代はまた、源治の心のうちを見透かしたように話し出した。

「仮に白兵戦にでもなれば、そんなものは邪魔でしかありません。いかに素早く、何人殺せるかです」

「へっ、こんな原爆や武器がうようよある時代に、白兵戦もないもんだぜ」

源治は八代にやられっ放しなのが癪に障り、そう口を挟んだ。けれども八代は少しも気にする風でなく、持論らしきものを続ける。

「果たしてそうでしょうか？ 原子爆弾などおいそれと使えるものではありません。朝鮮やベトナムがそうだったでしょう？ 戦闘機や戦車がいくら進んだところで、最後は人同士の戦いになる。それに指揮官をまず殺せば、いくら優れた兵器があっても役に立ちませんよ」

「ふん。上官の所までそう簡単に辿り着けりゃあな」

源治がそう返すと、八代は返事を返す代わりに、視線を源治から離していった。その視線の先を追って、源治はギクリとした。

「お解りになりましたか？ 人間離れしたあいつの動きであれば、それも不可能ではない」

確かにそうだ。銃を構えて引き金をひくというほんのわずかな時間。それさえも物ともしない、人間離れした動き。加えて人間を肉の切り身のように鮮やかに刻む手技。それらを考えれば、指揮官というターゲットに辿り着くのは、難しい作業ではないかもしれない。

「まったく、どうやってこんな化け物を鍛え上げたんだか。こんな奴がいたら、警察はお手上げだ」

源治はなかば自嘲気味に言葉を吐いた。

「ご安心ください。こいつの存在は警察なんかが扱う事件にはなりませんよ」

少々まわりくどい言い方だが、源治は八代の言わんとする事を理解した。

「じゃあ何か？ こいつは、戦争のために鍛えあげた人間なのか？」

八代はうすら笑いを浮かべるだけで、しばらく何も言わなかった。時間にすればほんのわずかだが、源治はその時が酷くながいに思えた。

「あの戦争の時、日本は勝つための研究を数多くおこなっていました。毒ガス、生物兵器、原子爆弾・・・」

「原爆だと？ 日本が原爆をつくろうとしたって言うのか？」

源治は戦後日本では最も忌み嫌われる兵器と言える原爆が、日本でも研究されていたという言葉に、驚きを隠しきれない。

「軍全部が精神論や竹やりで勝てるなんて思ってたはずがないじゃないですか。どう戦況を覆すか？ それにはココを使わないと駄目なんですよ」

八代が自分の頭を指差して見せたのが、ひどくバカにされたようで、源治には気に食わない。

「それでこんな化け物の育成も始まったっていう訳だな」

「ご名答」

源治の気持ちを逆なでするように、八代はますます小馬鹿にしたような口調になっている。

「ふん。しかしな。戦争はもう終わったんだぜ。こんな研究いつまでもやってたって、役に立つことは無いぜ」

それが源治の精一杯の反論だった。だがそれは同時に、黒幕を引き出すための問いでもある。これほどの研究を続けるには、何らかの後ろ盾、資金的な援助がいるはずだ。それが何処なのか。政界か？ 財界か？ 源治が感じていた巨大な影とは、まさしくそれであった。

ところが雄弁だった八代が、この問いに対しては、突如黙り込んだ。かと言って追い詰められた風でもない。あいかかわらず人を食ったように薄ら笑いは浮かべているからだ。

「お前らの後ろには、誰がいる？」

「警察の上層部にも、顔が効く野郎みてえだが」

源治はどんどん直接的な言葉に変え返答を迫っていくが、八代は口を噤んだまま、何も答えない。

源治は戦術を変える事にした。

「よう。ところで殺された男。あいつは一体何者だ？ てめえらがこんな化け物を育ててるって事の、口封じか何かで殺したのかい？」

「さあ、覚えてませんよ」

この問いには、八代はすぐに口を割る。

「おいおい。ここまで聞かせておいて、しらばっくれるってのは無いだろう」

「いえいえ。人は死にましたがね。けれどもそれが何処の誰だったかなんて、いちいち覚えてはいないって事ですよ」

「じゃあおまえたちは、知りもしない人間をこいつに殺させたってのか？」

源治の問いに、八代はため息まじりに答える。

「やれやれ。意外と物解りの悪い方だ。あれはね。こいつがどのくらいの時間であいつの殺し方ができるか？ それを広い場所で試すテストだったんです。あの男を村の中に逃がして、こいつを後ろから追わせてね」

八代は少し考えて、続けた。

「そうだ。こう言えば解りやすいでしょう。あの男は実験用のネズミです。実験動物の名前など、いちいち気にしないでしょ？」

話の中身はもちろん、八代の少しも悪びれた様子が見えぬ態度に、源治は苛立った。

「一体てめえらは、どこからそんな人間をさらってきた！」

しかし、八代の方は相変わらずで、小首を傾げて見せたりする。これもまた、源治の神経を逆なでするための意図的な行為なのだろうが。

「戦争中は支那や朝鮮の人間を使っていました。でも今は、日本にそんな“マルタ”はたくさんいますよ」

「マルタだと？」

源治の言葉には耳を貸さず、八代は身をひるがえすと、壁際に行き、そこにあるスイッチらしきものを押した。すると洞窟の奥が明るくなり、いっきに源治の視界が広がった。

「こいつは・・・」

源治はひき寄せられるように、明りの方へ歩み出した。ざわめきが起こる。けれどもあの包帯の男が一瞥すると、潮がひくようにまた静まり返った。

そこは、地下牢だった。中には、十や二十ではきかない数の男や女たちが、無差別に押し込められていた。どれもが源治に向かい、衰れを誘う目で見つめている。

「何だ、こいつらは・・・」

「マルタ、ですよ」

源治の呻きにも似た呟きに対して、八代は少しの躊躇もなく答えた。